

アンナ・キダーの故郷を訪ねて

小玉 敏子

一昨年、「横浜プロテスタント史研究会報」の合冊 (No. 1~No.41) が会員に送られた。それを見ると、ヘボン研究家の高谷道男先生を中心に、1981年9月19日に第1回研究会を開いたこの研究会が、対象を当初の宣教師から日本人キリスト者に広げ、あまり研究されていない、ほとんど忘れられていた人物、事柄、出版物などを掘り起こし、その成果を分かち合う機会を与えてきたことに改めて気がつく。私自身は数年前まであまり出席できず、発表もしていないが、今回読み直して、第203回(2000. 3. 18)「アンナ・キダーと駿台英和女学校」の補遺を書くことを思いついた。「アンナ・キダーと駿台英和女学校」は『英学史研究』(日本英学史学会)第33号に掲載されることになっていたため、『会報』No. 27には「アンナ・キダーの母校カレドニア・アカデミー」について書いた。

アンナ・キダー(1840.8.25-1913.11.23)が38年間校長をつとめた女学校は「駿台英和と改称された頃は、市内では、桜井、明治、頌栄、東洋英和の各女学校とともに程度の高い学校として教えられていた」(都史紀要9『東京の女子教育』、p. 41)という。しかし、残念ながら、1913年にキダーが、そして1917年に後継者マリー・アントワネット・ホイットマンが、召天したのち、1921年、ミニ・カーペンター校長の時代に、この学校は閉鎖された。

キダーというと、現在ではフェリス女学院の創立者メアリ・キダーの方がよく知られているが、クララ・サンズとともにアメリカの婦人バプテスト外国宣教師協会から派遣された最初の独身婦人宣教師とし

て、1875年11月に来日したアンナ・キダーは、日本の女子教育の分野でメアリ・キダーに劣らぬ貢献をしている。彼女はニューハンプシャー州アーモストで生まれ、1853年両親とともにヴァーモント州に移転した。アメリカ・バプテスト宣教師協会の問い合わせ(1908年8月20日付)に対し、キダーは1913年5月26日付で回答し、13歳以降はヴァーモント州が故郷となり、ここで教育を受けたと述べている。

ヴァーモント州東北部にあるカレドニア郡(Caledonia County)は1792年に誕生、ピーチャム(Peacham)は郡内最大の町であったので、行政の中心になることもできたが、先人たちはこの地に中等学校(the county grammar school)を設立する認可を州政府から得て、1797年12月1日に開校した。学校は発展し、1853年には学生数は183名であったという。キダーは、1854年から1861年までこの学校で学んだ、と百周年の際に母校に宛てた手紙に書いている。当時はまだカレドニア・カウンティ・グラマー・スクールと呼ばれたが、のちにピーチャム・アカデミーと名称が変わる。ラテン語、ギリシア語を主要教科としたグラマー・スクールから、近代語や実用的教科などを教えるアカデミーに変わり、教育課程も時代とともに変わったのであろう。この長い伝統を誇るピーチャム・アカデミーは、1960年代後半の教育界の変化や統合の波に押されて、1971年、廃校に追い込まれた。

2000年の夏、私は、夫とともに、ボストンから車で、クララ・カンヴァースの故郷ヴァーモント州グラフトンとアンナ・キダーの故郷ピーチャムに向かった。グラフトンはヴァーモント州南部にあり、ピーチャムは北部にあるので、まずグラフトンとその近郊の町を訪れてから、北に向かった。グラフトンもピーチャムも2000年当時の人口は六百数十名である。ピーチャムの図書館で出会った郷土史家に、アンナ・キダーについて調査していることを告げる

と、彼は私たちを教会とその墓地に案内してくれた。町の唯一の教会は組合教会で、アンナ・キダーもこの教会に属していて、バプテスト教会に転会したのはロードアイランドに行ってからである。教会の墓地ではキダー一家の人々のイニシャルを刻んだ5個の墓石の前に立つ墓碑の正面に

ANNA H.
DAUGHTER OF BENJAMIN
AND ELIZA KIDDER
1840—1913

MISSIONARY TO JAPAN FROM 1875
TO HER DEATH IN TOKYO

と刻まれていた。裏側には両親と幼くして亡くなった兄と姉と思われる名前とそれぞれの生没年、横には祖父と推測される名前と生没年があった。東京の染井墓地に有志によって建てられたお墓にお参りしたところのある私は、アンナ・キダーの墓碑に彼女の故郷で出会うことを予期しておらず、家族と故郷の人々が宣教師として日本に派遣された彼女を誇りに思っていたことを実感し、感無量であった。郷土史家は、私たちがはるばる日本から来たこと知り、「アンナ・キダーの働きが無駄でなかったのですね」と感慨深そうに言った。彼はジョン・ハーシーが「中国で宣教師として活動した両親の働きが無駄になった」というようなことを書いていると言っていた。

日韓のかけはしのパイオニア

—— 吉本斗川（張斗川）牧師の足跡 ——

小笠成美

1 苦難の時代

青年張斗川が日本警察官にきびしく尋問を受けた回想記である。

警察官「クリスチャンだって、朝鮮人の頭は腐っているからクリスチャンになるのだ」

張斗川「日本にもクリスチャンはいます」

警察官「いや日本にはクリスチャンなどいるものか」

張斗川「日本にも有名なクリスチャンがいます」

警察官「それは誰か」

張斗川「賀川先生です」

警察官「何だ。賀川豊彦を知っているのか。」

それではいよいよ怪しい。君が賀川を知っているとと言うなら、そのことだけで君を許すことはできない」

「この警察官は賀川先生を共産党員と勘違いしていたのでした。そのため私が夜中まで彼にいじめられ、油を絞られたのでした。」

（武藤富男編「百三人の賀川伝」上巻206～8頁 キリスト新聞刊 1960年）

吉本が記した苦難の生涯の一コマであろう。

来日し、牧師としての働きの最中に、誤解と偏見により、原宿警察署に検挙・留置されたが、吉本に何の落ち度や不法行為がなく、釈放されたことがあった。キリスト新聞記者鎌田正氏は「その時の美枝夫人の態度や斗川牧師に対する愛情と信頼には、警察でも評判になったそうである」と帰している。

2 恵みの時代

吉本が所有する千葉県市原の山野10万坪が農地法により政府と千葉県が取り上げることになった。しかし幸いなことに千葉県選出の国会議員であり、自民党の幹部の川島正次郎氏の尽力で、5万坪が返還された。日本キリスト教団池袋西教会金井為一郎氏もまた、吉本と川島氏を支えた。金井氏は吉本の神学校時代の恩師であり、指導し、支援した。

吉本にとってもう一つの幸いなこと、土地返還より大きな幸いというべきは、よきパートナーを得られたことである。その出会いを夫人の美枝牧師の記述を紹介したい。

「共立神学校時代に、市ヶ谷教会で実施訓練を受けた金井為一郎牧師から速達の手紙が来て、『是非紹介したい人がいる。会ってみませんか。彼は吉本斗川という名前です』と勧められた。」

「吉本がすぐここで（注 代々木教会）英語学校を建設し、語学と共に、聖書の福音を伝え、日本を平和な明るい国にするのだと抱負を弁舌で聞かせました。私にとってはほのぼのとしたさわやかさを感じ、この人なら希望のもてる『コルネリ

オ』と呼ぶのをはっきり見た、という使徒行伝（注 使徒言行録）の出来事のような現象に出会った喜びそのものだったんです。

私は吉本の情熱的なまでの戦争のないキリスト教主義に基づいた平和国家を建設しようという意気込みには、同感し共に戦い、伝道していくことを決心しました。」

吉本は夫人美枝の助けと協力を得て、国際キリスト教団の誕生と発展に全力投球を果すことができた。

賀川豊彦と金井為一郎の大伝道者の指導と支援を得たことは、大きな幸せであった。

3 平和への願い

代々木教会牧師としての働きとともに、超教派伝道組織「平和の鐘」を創設し、井上哲雄、石居英一郎、上石正義、黒田四郎各牧師の協力、参加のもとに大伝道集会・ラジオ・テレビ伝道を展開した。そして千鳥ヶ淵平和祈禱会、憲法発布記念平和祈禱会を開き、軍備のない、戦争を放棄した平和憲法への感謝と祈りを証した。

世界の平和と友好のため、特に東北アジアの平和と和解のためには、平和憲法が大切であることを祈り、訴えた。

吉本在世中（1910～1969年）は、日韓の関係は「近くて遠い国」と呼ばれていた。晩年の1965年になって、ようやく日韓基本条約両国間で結ばれ、日韓外交正常化が始まった。吉本はこの流れを喜び、感謝したことであろう。

吉本が苦闘した時代とちがひ、現代の21世紀にあつて韓流ブームが強まり、韓国からの多くの宣教師や伝道者が活躍している。まさに隔世の感があると言えよう。

まさに吉本はパイオニアであった。

（国際キリスト教団代々木教会協力牧師）

.....

ネイサン・ブラウン訳 2008年12月1日出版

『志無也久世無志與』

1880年 覆刻版

別冊・解説 川島第二郎著

ネイサン・ブラウンと『志無也久世

無志與』新教出版社 16000円（会員）

明治期の児童文学と若松賤子

尾崎 るみ

日本の児童文学は、西洋の児童文学の影響を大きく受けて明治中期に誕生した。若松賤子（ペンネーム、1864-1896）が訳した『小公子』は長く読み継がれ、優れた翻訳家としての評価がもたらされたが、児童文学における彼女の貢献はこれまでしっかりと検証されてこなかった。2007年6月に刊行した拙著『若松賤子——黎明期を駆け抜けた女性』（港の人）では、児童文学という新しいジャンルになぜ彼女が関わることになったのか、児童文学において彼女が果たした役割はどのようなものだったのかという点に焦点をあてた。

若松賤子は元治元年3月1日に会津藩士・松川勝次郎の長女として生まれた。本名は干支にちなんだ

「^{かし}甲子」である。戊辰戦争によって一家離散となり、

横浜の商人に引き取られた彼女はメアリー・キダーの塾で学び始める。キダーの薫陶を受けてフェリス・セミナリーの寄宿舎で成長するという特異な経歴は、優れたバイリンガルの資質と西洋の文学や文化への深い造詣、そしてキリスト教信仰を彼女に授けた。

第2代校長ブースのもとで第1回卒業生となり、教師として母校に留まると、若松賤子は学内に時習会という組織を設立して文学活動を開始した。その後、『女学雑誌』に傾倒した彼女は、同誌の主宰者であり、明治女学校の教頭（のちに校長）でもあった巖本善治と明治22年7月に結婚する。

『女学雑誌』は明治21年2月から「子供のはなし」欄を新設して子ども向けの物語を掲載し始めたが、これは本格的な児童向け雑誌の出現に先立つ、新しい試みだった。若松賤子は最初から児童文学者を目指したわけではなく、当初の彼女の望みは、文学をとおして日本の女性たちを啓蒙することだった。そのため、「子供のはなし」欄新設にあたって、西洋の児童文学事情に詳しくあった若松賤子がアドバイザー的役割を果たした形跡はあるが、同欄に最初から積極的に関わったわけではなかった。

若松賤子はまず詩や小説の翻訳に取り組み、やがて小説の執筆を試みた。明治 22 年秋には『女学雑誌』「小説」欄に「お向ふの離れ」と「すみれ」を發表している。前者は少女の視点で家庭内の出来事を描いた小品であり、後者は、早世した婚約者への思いを胸に秘めつつ、女性教師としてたくましく生きる主人公を描いて新しい女性像を示した物語である。

初めて注目された若松賤子の作品は、プロクター (Procter, Adelaide) の 'The Sailor Boy' という詩をもとにした翻案小説「忘れ形見」であった。母親と名乗れぬまま死んでいった「奥様」との思い出をこれから船乗りになる「僕」が一人称で語るこの作品を、若松賤子は生き生きとした口語体でまとめた。さまざまな文体を模索していた若松賤子だが、この成功により、口語体による執筆に自信を深めていく。

明治 23 年 8 月から若松賤子はバーネット (Burnett, Frances Hodgson) の *Little Lord Fauntleroy* の翻訳を「小公子」として『女学雑誌』「小説」欄に連載し始めた。第一子の出産間近に開始されたこの連載の背景には、「小公子」に描かれた理想的な母親像と子ども像への共感、そして読者に新しい親子のあり方を示したい思いがあったに違いない。

「小公子」の連載はしばらく順調に続いたが、肺結核をおしての出産であったためか、体調不良により休載となる。明治 24 年 5 月にようやく再開となったが、この時、掲載欄は「小説」欄から「児籃」欄へ変更となった。「児籃」欄の前身は明治 21 年に創設された「子供のはなし」欄である。これを契機として、若松賤子は深く児童文学と関わり始める。彼女は出産や育児をとおして児童文学の重要性や意義を認識することになった。また、この頃、時代の変化により、新しい女性像を掲げた進歩的な作品は受け入れられにくい状況が生まれていた。さらに、明治 24 年 1 月に博文館から少年文学叢書第 1 編として巖谷小波の『こがね丸』が刊行され、子ども向けの単行本として初めて商業的な成功をおさめたことも、大きな刺激となったものと思われる。

巖本善治は、明治 24 年 4 月に女学雑誌社から『子供のはなし』と題した物語集を刊行している。

『女学雑誌』の「子供のはなし」欄に發表されたものを中心とした、アンデルセン童話やグリム童話の翻訳を含む一冊である。また、再開された「小公子」は、連載途中ででありながら、明治 24 年 10 月に『小公子』(前編)として女学雑誌社から刊行された。これらの出版は明らかに『こがね丸』の成功を意識してのことだと思われる。

明治 29 年 2 月 10 日、若松賤子は 31 歳という若さでこの世を去った。生前に刊行されたのは『小公子』(前編)と『いわひ歌』(警醒社)の 2 冊のみだが、『女学雑誌』の「児籃」欄、『少年園』の「文園」欄、『少年世界』の「少女」欄に多くの子ども向け読み物を書き残した。また、キリスト教系英文雑誌である *Japan Evangelist* の婦人欄・子ども欄も担当し、多くの英文記事を書いた。明治 30 年には、桜井鷗村が若松賤子の翻訳をまとめて博文館から『小公子』として刊行し、この一冊は多くの人々に読まれることになった。子どもの読み物という新しいジャンルで若松賤子は誠実な仕事を残し、その後の児童文学の発達に大きく貢献したのである。

聖書と訳事業で活躍する 「医師・ヘボン」

石川 潔

1 Holy Bible の日本語訳への意欲

日本聖書協会の「聖書 (新共同訳)」の序文に「幕末にいたって J・C・ヘボン、S・R・ブラウン等が来日し、いずれも聖書の邦訳に努力しました。1880 年にはヘボンを中心とする『翻訳委員社中』により『新約聖書』が刊行されました。」と書かれている。聖書と訳という大事業の中で、ヘボンの役割がいかにか大であったかを示している。しかし、このヘボンは聖書学者でないし、神学教育を受けてヘブル語やギリシャ語を習得した牧師の資格をもつ宣教師でもない。ひとりの信徒で、ニューヨークの一開業医出身の宣教師である。ひとりの医師が来日して、医療を通しての宣教活動の中で、日本語聖書を完成するまでの使命

感とその活躍について考えてみたい。

2 聖書和訳についての使命感

ヘボンの肩書きは「**Medical Missionary** (医療宣教師)」である。しかし、ヘボンの認識は医療を通して宣教することに止まらず「信徒医師として、医療活動をするしないに関わらず、キリストの愛を日本人に伝える」という使命感に燃えていたものと推察する。ヘボンの日本における行動は、その書簡(ミッションへの報告書・連絡)と弟への私的な手紙とで記録されている。それは合計で**249**通が現存している。その内容では、医療に関しての日本の衛生状態や日本人の病気、日本医療の現状や日本人への医療行為に関する事項よりも、日本における**聖書翻訳**に関係する内容の方が多く目に注目したい。

3 ヘボン書簡での訳業の記述

ヘボンの書簡では、**102**通に聖書翻訳に関して記述されており、その最後のものは<1888年1月30日付>の「**旧新約聖書全書**完成のときである。「日本語で書かれたこの書物は、金にも銀にもはるかに勝る尊いものです。」と記している。

4 翻訳委員社中の新約聖書翻訳事業

新約聖書については、その翻訳を進めていくグループは委員会ではなく「社中」という名称で結成されている。「社中」とは現在も邦楽などで使われている語であり、<ある団体の仲間>の意をもつ語である。1874年(明治7年)3月25日に結成されている。最後までこの訳業を担当していたのは、**S.R.グラウ**、**D.C.グリーン**、**R.S.マクレー**とヘボンの4名であった。

5 旧約聖書は「聖書翻訳常置委員会」で

1878年(明治11年)5月10日と13日の2回、築地のユニオンチャーチで宣教師会議が開かれ、聖書翻訳は各在日ミッションの共同事業であることが確認され、「常置委員会」が誕生する。この委員会の正式名称は「**聖書本文の翻訳・改訂・出版および保存のための常置委員会**」である。英語では**"The Permanent Committee on the Translation, Revision, Publication and Preservation of the Text of the Holy Scriptures"**という長い名の委員会である。

6 私信「ヘボンの手紙」から

大の仲良しの弟 スレーターへの手紙においても、「聖書和訳」についての記述は多い。スレーターは牧師であるだけに、聖書翻訳のことについて相談、報告している。私信であるだけに、ミッション本部や米国聖書協会には話しにくい「胸のうち」や「愚痴のような話」すら書いている。

7 舊新約全書の完成

1888年2月3日、築地の新栄教会で「**舊新約全書完成祝賀会**」が開かれる。訳業が始まってから、**12**年6ヶ月、最初から完成まで訳業に当たったのは、医師・ヘボンただひとりである。ヘボンが個人的に聖書と訳業に着手した時から数えると**25**年8ヶ月である。この祝賀会で挨拶に立ったヘボンは、二冊となって完成した「**舊新約全書**」を一冊ずつ両手に持って、これを重ねてから語り始めたという。現在、この完成された**舊新約全書**を「**明治元訳** (もとやく)」と読んでいる。

8 Holy Bibleは何故「聖書」なのか

舊新約全書が完成した時は、背表紙に**Holy Bible**、日本語で右から「**舊新約全書**」と書かれており「**聖書**」とは書かれていない。「**聖書**」という語を**Bible**に使ったのは1872年刊行のヘボン、**S.R.グラウ**共訳の「**新約聖書馬可傳**」からである。「**聖書**」と言う語は、**ブリッジマ・カルバートソン**共訳の漢訳聖書からの影響と言われるが、ヘボンの漢字、日本語における知識から「**聖なる書物は即ち聖書**」は当然のことと言える。「**聖書は、日本にある教会がすべて同じものでなければならない**——というヘボンの信念が日本語聖書を完成させたのである。牧師でなく、神学者でも文学者でもない「**ひとりの医師**」が日本での二十数年の時間と労力を投じて、翻訳チームのリーダーとして完成させている。それには日本人学識者たちの努力があつてこそである。そしてこの「**聖書**」は明治・大正期における日本文化に大きな影響を与えている事実を忘れてはいけない。

.....

歴史文化ライブラリー267 吉川弘文館

『**敵国人抑留—戦時下の外国人**』

小宮まゆみ(会員)2009年3月1日発行 1800円

横浜開港と宣教師たち

一伝道とミッション・スクール

横浜プロテスタント史研究会編

本書は、横浜プロテスタント史研究会が1988年に、同じく有隣堂から出版した『図説 横浜キリスト教文化史』に続く、2冊目の成果である。本書のあとがきによれば、同研究会は1981年にヘボン来日120周年の際に組織され、今日まで毎月例会を持っているとのこと。

来年は横浜開港、そして横浜にプロテスタントの宣教師が来て150周年を迎える。その節目に、同研究会のメンバーによって本書が上梓されたことは、たいへん意義深いと言える。

横浜は明治維新以降、西洋との貿易港となり、西洋文化の導入に大いに貢献し、今日に至っている。宣教師は、まさしく西洋を体現した人格として、当時の日本人に多大なる感化を与えた。

本書では横浜に来た11人のアメリカの宣教師を取り上げている。彼らの生涯から、日本伝道を志した経緯や、日本での活動の様子を詳細に知ることができる。本書に登場する宣教師は次の通りである。

J・C・ヘボン、S・R・ブラウン、J・H・バラ、N・ブラウン、A・A・ベンネット、M・E・キダー、M・P・ブライン、L・H・ピアソン、J・N・クロスビー、C・A・カンヴァース、O・ハジス。

以下、本書から教えられたことを3点記したい。

第1は、本書で紹介されている宣教師の多くが、インド・中国その他のアジア伝道の経験を踏まえ、来日していることである。したがって、彼らは、すでにアジアの言語を習得し、現地の文化習慣に精通している宣教のベテランとして来日している。

そして日本伝道を最後に帰国し、故国で、あるいは日本で逝去している。当時のアジア伝道で、日本は最後の任地だったことがわかる。

第2は、宣教師たちのネットワークである。教派を超えた、協力体制が出来ていたのではないかとくに女性たちは、日本伝道の先輩たちに感化され、自立した生き方の実践として伝道と教育に邁進した

のである。

宣教師たちは、孤立していなかった。まして対立などしていなく、主にある同僚として励ましあっていたことが本書から読み取れる。

第3は、宣教師たちの活動の意味である。宣教師という人格を通して、当時の若者たち、とくに女性たちが学んだことの1つが、キダーと夫ミラーとの家庭生活に感化されたお弟子さんたちの結婚と、その家庭が「夫婦の愛を前提とする『近代家族』のはしり」となったことである。「明治初期に展開された女性の宣教師による女子教育の最大特徴と意義はここにあった」という小檜山ルイ氏の指摘は興味深い。有隣堂、新書判・216頁・1050円

評・原島 正（東洋英和女学院大学）

『キリスト新聞』2008年11月15日より転載

研究発表リスト（その32）

第291回 2008.4.19 田中 浩司

「内村鑑三の文学観」

第292回 2008.5.17 小笠 成美

「日韓のかけはしのパイオニア

— 吉本斗川（張斗川）牧師の足跡 —」

第293回 2008.6.21 尾崎 るみ

「明治期の児童文学と若松賤子」

第294回 2008.7.19 石川 潔

『聖書和訳で活躍する「医師・ヘボン」』

第295回 2008.9.13 阿部 志郎

「横須賀のキリスト教の歩み」

第296回 2008.10.18 出版記念会

「横浜開港と宣教師たち—伝道とミッション

・スクール」横浜市健康福祉センター10階

第297回 2008.11.5 橋本 茂

「賀川豊彦—その社会学的考察」明治学院記念館

1階小チャペル 明治学院歴史資料館主催、明治

学院大学キリスト教研究所、横浜プロ研共催

第298回 2008.12.20 江刺 昭子

「明治中期におけるプロテスタントの社会活動」

《編集後記》

横浜が開港されて150年目を迎える年に先立って、『横浜開港と宣教師たち』が研究会の方々のご協力により出版できて感謝です。(K. O.)